

やまがた観光まちづくり塾 開塾の趣旨

あのまちに行きたい、あの風景に包まれたい、あの人に会いたい…芭蕉は、人をそんな旅立ちへのうずうずした気分させる神様を「そぞろ神」と呼びました。みちのくは芭蕉にとってそぞろ神だらけ。思い立つなり江戸深川の家を売り払い、ワクワクしながら白河の関を超え、松島を訪ね平泉に詣り、そして山形の地へ。尾花沢、山寺、大石田、出羽三山、鶴岡から日本海酒田へ。それはまことにスリリングで愉快で感動的で、けして芭蕉を飽きさせず期待を裏切らなかった。その証拠に奥の細道の中でも屈指の名句と名文を幾つも残しています。

いま山形らしさと呼ばれているものには、人と自然との古くからのつきあいから生まれたものが多い。

「最上川はみちのくより出て、山形を水上とす…板敷山の北を流て、酒田の海に入る」と奥の細道に描かれた最上川は、まさに山形のシンボルの一つ。この川は山の方から流れ出するから「山方」、転じて山形となったとか。

芋煮は山形を代表する名物。芋煮会は戦前、旧制山形高校の学生や山形連隊の将兵が河原で食べた野外食に始まるなど諸説ありますが、山形と里芋のつきあいはもっと古く、山形に米作が伝わる以前、縄文の昔から山形地域の人々は主食にしていたとか。

今や全国区となった冷やしラーメンにしてもけして昨日今日生まれたキワモノではなく、既に昭和26年来のもの。山形盆地の暑い夏が生んだ立派な食文化です。

このように山形は、人と自然との仲のよい営みが生み出す個性的な魅力に彩られた素晴らしい県です。

さて、行きたいまちは住みたいまちといわれます。いま山形は、県外の人々にとってそぞろ神に取り憑かせる魅力をもっているのでしょうか。県外の人々にとって本当に、訪れたい、訪れても裏切られない、住みたくなるまちでしょうか。

また、住みたいまちは行きたいまちといわれます。山形人は皆、自分のまちや暮らしにこだわり、誇りを持っています。でも県内の人々にとって山形は本当に、住みたい、住んでいても裏切られない、人々から憧れられていると自信を持てるまちでしょうか。

「住んでよし」と「訪れてよし」が一致するまちこそ、愛されるまち、愛せるまちです。そんなまちはめったにありません。でもそれが理想です。

このまちに生まれてよかった このまちに来てよかった、そういうまちづくりが、本塾の目指す「観光まちづくり」です。本塾は、これに山形をあげて取り組むキッカケづくりがねらいです。

庄内の冬の真鱈のおいしさを置賜の人はあまり知らない。逆に置賜の春の瑞々しい山菜は庄内ではあまり知られていません。同じ県内でも知らないことは大変多いものです。

まちづくりの知恵も同じです。それらを互いに交流し合い、切磋琢磨すればひとつひとつのまちが光り、山形は輝く宝石箱となります。

寒河江川や鮭川などたくさんの流れが集まって最上川となります。県内各地域のまちづくりの流れが交われば美しい山形の大河となり、力強い発信力となって人が集まり、県民の誇りとなって暮らす喜びとなります。

みんなで山形をあらためて見直し、磨きましょう。一人ひとりの、一つひとつの地域の、山形県の明日をもっと輝かせるために。